

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：岩川ありさ

岩川ありさ氏の博士号請求論文『現代日本文学におけるトラウマの語り—フェミニズムとクィア批評の視座から』は、現代日本文学において、トラウマ的な出来事の記憶が、いかに語られ、聴かれ、伝達されているのか、その困難さと可能性について、フェミニズムとクィア批評の視座から分析を行なった論文である。

第一部「傷が語る—沈黙と証言」では、大江健三郎『美しいアナベル・リイ』、林京子『祭りの場』、『長い時間をかけた人間の経験』を取り上げ、戦後の長い歴史を創作に携わって生きてきた二人の作家が、過去に書いた自らの小説について批判的に自己言及することによって、トラウマ的な出来事を言語表現にもたらず困難と対峙しながら小説作品を作り上げていったさまを描き出した。

第二部「世界を語る文法—人称、時制、仮定法」では、多和田葉子『容疑者の夜行列車』、小野正嗣『獅子渡り鼻』、岩城けい『さようなら、オレンジ』を取り上げ、多言語間を揺れ動きながら創作を続ける作家たちの試みが、従来の日本語の人称や時制といった文法のあり方によって抑圧されてきたトラウマの様態を表面に露出させ得る表現を実現していることを論じた。

第三部「物語の複数性をめぐって—クィア批評と聴き手」では、森井良「ミックスルーム」、李琴峰『独り舞』、古谷田奈月「リリース」を取り上げ、社会によって周縁に追いやられる、いわゆるセクシュアル・マイノリティを主題とした作品たちが、いかにないもの／なかったものとされる自らの声を読者に届けていくか、そして読者はそれをどう受けとめるべきかという問題について考察した。

第四部「べつの仕方で—記憶、変身、連累」では、多和田葉子『雪の練習生』、『献灯使』、清家雪子『月に吠えらんねえ』を取り上げ、人間と動物の境界を越境すること、東日本大震災以後の環境論的転回、サブカルチャーの表現の可能性などに論点を広げつつ、文学作品の表現が解き放つ可能性を持つ、社会的・歴史的な複数の声について論及した。

以上のように、本論文の特長は、多様な作家、多様な作品の内に秘められている現代社会の抑圧された声がどのような経路で表われ出ているのか、そしてそれを我々はどうのように聴き取ればよいのか、という主題を真摯に追究した点にある。

審査委員からは、それぞれの章がもともとは様々な雑誌に発表されたものであるがゆえに全体としての有機的な繋がりを欠いているのではないか、論者の関心が読みに強く反映

されているがゆえに、作品の一部のみがクローズアップされ、全体が見えにくくなっているのではないか、序論の理論的な構えが十分活かされているとは言えず、文体にもある種の温度差が生じているのではないか、テキストの一つ一つの言葉、あるいはナラティブの様態について踏み込んだ分析が足りないのではないか、第四部の位置づけが他の部と比べてあいまいではないか、などといった疑問が出された。

しかし、提出資格審査時と比べて、本論文の議論が格段に厚みを増し、全体を貫く軸が明確になったという点で、審査委員の意見は一致した。各章が多様な出自を持つことについても、そのことがトラウマという主題の広がりや垣間見せることに繋がっているという肯定的な評価もなされた。また、従来のトラウマ表象の研究が、語り得ないものをいかに表現し得るかという点に着眼していたのに対して、本論文はその先の議論、すなわち非当事者が、いかに語り得ないものを聴き取り、それを継承していけるかという点にまで踏み込んだ作品読解を行っており、この点が本論文の最大の独創性をなすという点についても、審査員のあいだで意見の一致を見た。何より、本論文が現代文学を対象としつつ、文学研究と社会とのあるべき関係を新たに再構築しようとしている、その一貫した姿勢が、それぞれの審査員から高く評価された。

以上のことから、本審査委員会は、岩川ありさ氏に対して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。